

最優秀賞の「stand by…」は作品の構成が巧みで、そのことにまず感心しました。また、登場人物たちが息づいていて、ひとつひとつのエピソードにリアリティがあるのも、とてもいい点だと思います。

主人公は、警備会社の契約社員である四十代の男性、佐伯達郎。彼は、多くの犠牲者を出した鉄道列車事故の現場で警備の仕事に就くこととなります。佐伯は以前、まったく別のジャンルの仕事をしていて、家族もいましたが、いまは独りで暮らしています。

そういった佐伯の状況と、現在に至るまでの経緯と、父としての気持ち。

佐伯と別れた妻と息子の暮らしと、二人の、佐伯への思い。

列車事故現場を訪れる、遺族たちの心情。

それらを、「時」を動かし「視点」を切りかえながらつなげていく書き方がじつにうまく、収束のさせ方も洒落ている作品でした。

四十代男性の、仕事や会社に対しての見方も、違和感なく描いています。

「stand by…」の作者は、2016年度と17年度に「記憶の手帳」「思い残し(ゼロ)本舗」で佳作を、そして今年度は最優秀賞受賞と確実に腕を上げており、頼もしい限りです。さらなる熟達を期待しています。

奨励賞の「交点の贈りもの」は、不登校になる小学六年生の男の子の心のうちがわかりやすく書かれている物語です。

男の子の尊敬する祖父は入院中。男の子は祖父を喜ばせたいと、見舞いにいく度に学校生活の楽しい話をいろいろしますが、それらは嘘にほかならないのでした。

男の子は、夢の中のある場所で、ひとりの少年と出会い、友だちになります。夢の世界と現実の世界を行き来しながら、男の子は少年に問うのでした。嘘と、真実について。

後半、少年の「語り」がやや冗漫なのと、ラスト近くで少年の正体がわかってから話をまとめるまでも少し長いのが気になりました。

しかし男の子が、自身で「生き方」の気づきを得るという終わり方には好ましい感じを受けましたし、諸所に祖父のあたたかさがにじみ出ている、心に沁みる作品でした。

入賞にはとどきませんでした。が、「あの日、君と桜の下で。」も印象的な長編です。中学三年生の男子三人、女子二人の五人を中心に、素直に描かれている青春ストーリー。

カラオケボックス、夏祭り、花火、告白、カップル、コンビニ、秋の夕日など、ピュアでさわやかなシーンが続いたあと、物語は一転、一人の男子が事故に遭い……。

後半は展開がちぐはぐし、不自然なところが目立ちます。亡くなった男子、悠斗の母が四人に会うタイミングや、悠斗が四人それぞれに手紙をのこしていることなども、現実感が少々薄いと言わざるを得ません。

けれど作者は中学一年生。その年齢でここまでの水準の作品を書いたことは、感嘆に値します。これからもぜひ、書き続けてほしいと思いました。